

「京」の世界

今

年二月、日本のスーパーコンピュータ「京」(理化学研究所)が世界一の計算速度を達成したというニュースがあった。演算速度は毎秒一京回を超えるという。「京」(けい/きょう)というのは、一兆の一万倍。一〇の二六乗の単位を指す。

「千、万、億、兆、…」の次の単位は「京」と知っていても、巨大数の「京」が日常世界に突然現れると、やはりびっくりする。実は、身近な経済の世界でも、巨大数の「京」という単位は無縁ではない。

例えば、日本の年間GDPは五三九兆円(二〇一〇年度)、国債発行残高七五八兆円、家計の個人金融資産一、四〇〇兆円…と「兆」の付く数字はいくつもある。今のところ、一応四桁の「兆」の範囲で収まっている。

ただ、国債や社債を売り買いする債券売買高(現物債)を見ると、二〇一〇年度は七、七三兆円だが、〇六〜〇八年度は年間一京円を超えていた。一方、近年急速に増えている外国為替取引。東京市場の取引高は日平均二千億ドル強(約一六兆円)とされ、年間では約五〇兆ドル。円表示だと「京」の世界に近づくが、あいにく外為取引はドル表示が原則。ゼロの数が少ないドル表示のおかげで「兆」に留まっている。

では、世界の外為取引はどうか。一日本平均の取引高は、直近の統計では四・七兆ドルに増大した(BIS統計では三・九兆ドル)とされる。これを年間に引き直せば、四桁兆ドルを軽く突破する。ドル表示でも「京」の世界が現実化してきたと言える。

ただし、数に名前を付ける命数法は、英語圏と漢字圏では異なるため、「京」に相当する単位は、欧米にはない(一京=10quadrillion)。

巨大数の命数法は、中国を中心とする漢字文化圏では、四桁ごとに位取りの単位を定める。「京」の次は、「垓(かい)」「秭(し)」「穰(じょう)」「溝(こう)」…と、ゼロが四つずつ増えていく。そして、最大の命数単位「無量大数」は、一〇の六八乗、つまりゼロの数が六八個も連なる超巨大数となる。

これらの巨大数は、一七世紀初めに日本に伝えられたというが、それにしても、想像を絶する壮大な数の単位

を考えついた中国古代人たちのひたむきさには、ただただ恐れ入る。

人類社会では、近代科学の発達で可算数の上限は果てしなく広がった。科学の世界では、「人体の細胞の数」(二〇の二三乗)、「人体を構成する原子の数」(二〇の二七乗)…などがある。ただ、これらの巨大数の表記は一〇の何乗という形で示され、「京」以上の単位名は使わない。

考えてみれば、欧米圏の命数法は、三桁ごとの位取り(million、billion、trillion)だから、東洋の「万、億、兆…」とは基本的になじまな。「10billion」をわざわざ「二〇〇億」と言い換えるのは、きわめて日本的な命数法というほかない。

そして、同じ漢字文化圏の現代中国では、大きな数の単位が実は日本とはかなり違う。例えば、中国の「億」=「万万」は一〇の八乗で日本と同じだが、「兆」は一〇〇万の位を指し、「兆」より「億」の方が大きい。日本の「兆」は「万億」と表し、その上の「京」も「億億」と呼んで、「京」という単位は実際には使わない。

となると、日本の「京」という命数単位には、どうしても何か独特の響きがかもっているように聞こえる。億から兆へ、兆から「京」へと発展していく

姿は、一見勇ましげに映るが、はたしてそうか。

経済の世界では「数」が増えることは、基本的に好ましいこととされてきた。その背景には、人間の経済活動の活発化、つまり成長による経済の「巨大化」の構造がある。「大きいことはい」という時代は今も続いている。スパコン世界一というのは、その二つの象徴でもある。

しかし、金融の巨大化は、世界経済の健全な成長を反映した結果とは言いがたい。巨大規模に達した外為取引や債券取引は、経済の機能潤滑化というより、金融産業の自己利益の実現の場と化した。過剰流動性を背景とした金融の「カジノ化現象」は、量的な拡大によって、ますます制御しにくくなっている。「京」の世界には、決して健全とは言えない匂いがあることは間違いない。

しかも、「京」の表記は、日本でしか通用しないローカルな計数単位となる。「京」は「けい」なのか「きょう」なのか、呼称も判然としない。「京」の世界で見えてくる経済の姿は、考えさせられることが多い。

萩原慎一郎

経済ジャーナリスト

